

都市教養プログラムの現状と課題

都市教養プログラム部会長
都市教養学部人文・社会系教授

下川 昭夫

都市教養プログラムは「大都市に関連する様々な課題に取り組み、解決できる人材の育成」が目的であり、「様々な領域の学問からのアプローチを学習する手がかりを学ぶ」ための教養科目群である。以下に平成23年度前期における授業評価アンケートの調査結果を示し、都市教養プログラムにおける課題を検討する。

【調査対象・質問項目の概要】

授業評価アンケートの対象者および回収率は表1の通りである。回収率の不十分さに関する課題は過去のレポートでも一貫して指摘されており、今回もそれほど大きな変化は見られなかった。大規模授業での出席率などの影響も示唆されているが、理由を確認する必要性が指摘されている（佐藤、2010）。

回収率の不十分さは改善すべき1つの課題と見なすこともできるが、逆に他のかっちりした科目群と比べて、比較的自由的な枠組みを持っている都市教養プログラムの目的から生じている特徴とも考えられるのではないだろうか。

表1 調査対象者

| | 対象者 | 回収数 | 回収率 |
|-----------|--------|-------|-------|
| SE 履修登録者数 | 14,731 | 7,158 | 48.6% |
| 授業数 | 95 | 83 | 87.4% |
| TE 担当教員数 | 133 | 86 | 64.7% |

表2は学生による授業評価項目である。教員による授業評価項目もこれにほぼ対応し、教員の取り組みを評定できるようになっている。問1から問8までは他の科目群と共通であるが、問9から問12は都市教養プログラム独自の質問項目である。

問5および問10をのぞく問1から問11までは「1. 全くそう思わない」「2. そう思わない」「3. どちらとも言えない」「4. そう思う」「5. 強くそう思う」の5段階評定である。問5は「ほぼ0時間」「30分程度」「1時間程度」「90分程度」「2時間以上」の5段階、問10は

「1. 難しかった」「2. やや難しかった」「3. ちょうどよかった」「4. やや易しかった」「5. 易しかった」の5段階、問12は「少なかった」「やや少なかった」「ちょうどよかった」「やや多かった」「多かった」の5段階評定である。

表2 質問項目 (SE)

| | |
|-----|--|
| 問1 | 私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ（態度） |
| 問2 | 授業の目的を意識しながら学習することができた（意識） |
| 問3 | 教員の説明はわかりやすかった（説明） |
| 問4 | 教員は学生の質問・意見に対して適切に対応していた（対応） |
| 問5 | 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？（時間） |
| 問6 | 成績評価方法について十分な説明があった（成績） |
| 問7 | シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた（成果） |
| 問8 | 私はこの授業を受講して満足した（満足） |
| 問9 | この授業のシラバスは 授業選択に役立つような内容でしたか？（シラバス） |
| 問10 | 授業全体を振り返ってみて、あなたにとってこの授業の難易度はどうでしたか？（難易度） |
| 問11 | この授業を受講したことによって、自分の視野が広がったと思いますか？（視野拡大） |
| 問12 | 授業の内容や形態を考えると、このクラスの人数はどうであったと思いますか？（受講生数） |

【調査結果と考察】

表3は上記の質問項目による回答を数値化し、学生および教員による授業評価結果の平均値（ M ）および標準偏差（ SD ）を求めたものである。どの項目も平均値は教員が高く、標準偏差は学生の方がばらつきが大きくなっている点特徴的である。この傾向は過去のレポートでも一貫しており、それぞれの調査対象者の人数の差や授業を提供する側と提供される側の意識の差を表していると考えられる。

両者の差が大きい項目は「意識」「説明」「成果」「成績」「視野拡大」であり、逆に小さい項目は「満足」「態度」「難易度」「対応」などである。これらの数値的な差がそのまま教員と学生の実際の取り組みの差と考える必要はあるまい。教員はそうのように考えて取り組んでおり、学生は教員が考えているようには受け取れない者もいると考えるのがよいのではないだろうか。

表3 問1 から問11 までの平均値と標準偏差

| 質問項目 | 学生 | | 教員 | |
|----------|-----|-----|-----|-----|
| | M | SD | M | SD |
| 1. 態度 | 3.4 | 1.0 | 3.6 | 0.6 |
| 2. 意識 | 3.4 | 1.0 | 4.1 | 0.7 |
| 3. 説明 | 3.6 | 1.0 | 4.2 | 0.6 |
| 4. 対応 | 3.6 | 0.9 | 3.9 | 0.8 |
| 6. 成績 | 3.5 | 1.0 | 4.0 | 0.8 |
| 7. 成果 | 3.3 | 0.9 | 3.9 | 0.7 |
| 8. 満足 | 3.6 | 1.0 | 3.7 | 0.6 |
| 9. シラバス | 3.5 | 0.9 | 3.9 | 0.7 |
| 10. 難易度 | 2.8 | 0.9 | 3.0 | 0.7 |
| 11. 視野拡大 | 3.7 | 1.0 | 4.2 | 0.6 |

表4は問5（学習時間）と問12（受講生数）に回答した学生と教員の割合の分布である。受講生数の印象は学生・教員ともそれほど大きな食い違いはない。学習時間の割合の差の特徴は、教員は少しは学習して欲しいと考えているが、学生はその意にやや反して、その教科をほとんど学習しないと答えた割合が多い点である。

都市教養プログラムの目的は「大都市の課題に取り組むため様々な手がかりを学ぶ」ことであるため、多くの新生が多様な科目を聞きかじり、インスパイアされ、将来的にじっくり取り組んでゆくための足場を作ってゆく科目として位置づけているのではないだろうか。

興味深いのは教員も学生もその教科に関して週に1時間以上も学習して欲しい・していると回答した者が合わせて約7%もいる点である。教員はともかく、学生がどのようなわけでこれほど時間をかけて取り組んでいるのか、個別の聞き取り調査があれば今後の教員の取り組みへの参考になるのではないだろうか。

また学生による自由記述では改善が必要な点として授業における技術的課題が主に取り上げられている一方、内容的には「視野が広がった」といった意見も多

く、都市教養プログラムの主な目的はある程度、果たされているのではないかという印象を受けた。

表4 時間と受講生数に回答した学生と教員の割合の分布

| 5. 時間 (%) | 学生 | | 12. 受講生数 (%) | | 学生 | | 教員 | |
|-----------|------|------|--------------|------|------|----|----|----|
| | 学生 | 教員 | 学生 | 教員 | 学生 | 教員 | 学生 | 教員 |
| ほぼ0時間 | 58.7 | 33.7 | 少なかった | 0.8 | 2.3 | | | |
| 30分程度 | 21.5 | 36.0 | やや少なかった | 3.0 | 2.3 | | | |
| 1時間程度 | 13.3 | 23.3 | ちょうどよかった | 55.9 | 46.5 | | | |
| 90分程度 | 3.7 | 4.7 | やや多かった | 23.6 | 24.4 | | | |
| 2時間以上 | 2.8 | 2.3 | 多かった | 16.8 | 24.4 | | | |

【まとめ】

昨年度の報告書「都市教養プログラムの現状と課題」（佐藤、2010）では、それまでの6年間のデータを分析し、授業評価アンケートおよび都市教養プログラム自体の課題について詳細に述べられている。それによると授業評価アンケートでは結果が毎年同じ傾向にある点が指摘され、集計の後の解析→問題点の把握→原因の特定→具体的・有効的な対策→授業の改善のプロセスが回っておらず、アンケート自体を見直す時期に来ていることが指摘されている。また都市教養プログラムでの制度面での見直しの議論が始まったことについても言及されている。

今後、都市プロ科目は「幅広い知識や視野を養う教養プログラム」と「専門科目に接続する基礎的・導入的プログラム」に再体系化されていく予定である。それに伴い、多様な科目を聞きかじることによって視野を広げてゆく科目と、将来に向けて時間をかけじっくり取り組んでゆく科目で、学生の取り組み方や教員が提供する授業内容の多様化が必要になってくるのではないだろうか。

【引用文献】

佐藤潔、2010、都市教養プログラムの現状と課題～授業評価アンケート（2010年度前期）の解析から～、FDレポート『クロスロード10号』、p65～68